善意の作業着でエール

松江工高生

更生保護施設に毎年寄贈

心遣い 再起の力に

松江工業高校（松江市古志原4丁目）の生徒が代々、実習用の作業着を卒業時に手入れし、更生保護施設「しらふじ」（同市奥谷町、大野美雄理事長）の利用者に贈っている。保護者1人の善意で始まった取り組みが、校内に広がった。購入費の節約もさることながら、気遣いが利用者の心を温め、再起のエネルギーになっている。生徒にとっても社会学習になっており、関係はより深まりそうだ。（多賀芳文）

作業着を補修、洗濯した松江工業高校ＪＲＣ部員たち＝松江市古志原４丁目、同校

「若者に背中を押され、しっかりしなければと思う」。広島県内の刑務所で3年4カ月服役後、しらふじに身を寄せた広島市出身の元受刑者男性(56)は、高校生の思いをかみしめる。就業訓練に汗を流す中、善意の作業着が励みになっている。

しらふじでは現在、20～70代の男性16人が集団生活を送りながら自立を目指す。多くは、建設土木業で就業訓練し、生活資金をためながら就職活動をする。

作業着は欠かせないものの、新調するには上下で1万円近くかかる。手持ちの資金は少ない施設利用者にとって大きな負担となる。

作業着の寄贈は2017年に始まった。しらふじを知る同校の保護者の1人が「お役に立てれば息子の作業着を」と寄付を申し出たのがきっかけ。翌年、翌々年と校内で賛同の輪が広がった。

現在は同校ＪＲＣ部が寄贈する作業着の管理を担当しており、今月上旬に部員5人が約100着を丁寧に補修、洗濯して梱包した。24日に贈る。部長の阪本清四朗さん(17)＝2年＝は「活動をするまで、しらふじの存在は知らなかった。役に立てるのならうれしい」と話す。顧問の高野豊教諭(49)は「若い時から、助け合いで世の中が成り立っていることを知ってほしい」と願う。

しらふじの矢野喜郎施設長(69)は、服役後にきちんと就業することが再犯の防止に極めて重要だと強調。「下支えが、更生につながっている。ありがたい」と感謝する。

贈られた作業着で仕事に出る施設利用者＝松江市奥谷町、しらふじ